

アン・ビーティ『燃える家』に関する一考察

菊池 せつ子

A study of The Burning House by Ann Beattie

Setsuko KIKUCHI

Abstract

This story, The Burning House, one of 16 ones in a striking collection from Ann Beattie is marvelously written poignant in that each character, the uppermiddle-class intellectuals in an urban city reveals so much about how to live and feel in the daily life.

Beattie has a real subject, and a highly interesting one. Her subject is the fate of her own generation that was in college and graduate school in the late 60's and 70's. This generation grew up in the shadow of the Vietnam war, and it was the first to have a free hand with sex and drugs.

The main character, Amy in this story is in "the burning house" and her husband Frank is drifting up in space, free of the chaos and the debris, so unfortunately they don't seem to be able to communicate or understand eternally. But J.D. or Freddy cannot help her because he lacks the energy to help anyone, including himself, out of his predicament, preferring waiting or getting stoned.

Beattie's writing is beguilingly simple; she has one of the most distinctively clean style of any other writers. She has maintained her superior quality, depicting with exceptional perception all shades of the people and the places she know best. Her people are witty, affluent and troubled with a remarkable evocation of a disintegrated marriage, feel alienated with a sense of loneliness and loss.

Key Words: the background of the age, stray urban intellectuals, the thirst to love, loneliness
キーワード: 時代背景, 彷徨う都会派インテリ, 愛へ飢餓感, 孤独感

はじめに

アン・ビーティ (Ann Beattie) は 1976 年最初の短篇集『歪み』(Distortions) を出版して以来、これまでに四つの短篇集と 1990 年 1 月に出版され、アメリカで大評判になった Picturing Will を含む四つの長編を書いているが、彼女の世代に代表される (1947 年生まれ) 現代の孤独感や恋愛観を、これほどきめ細やかに、生々しく写し取るこ

とのできる作家はおそらく他にいないだろうと思われる。

本篇で取り上げる『燃える家』(The Burning House) は 1979 年から 82 年にかけて、主として『ニューヨーカー』に発表されたのをまとめて 1982 年に出版され、『ニューヨーク・タイムス・ブックレビュー』が毎年選ぶ“年間ベストブックス”の一冊に選ばれている (ちなみに、ここに選ばれることは、作家にとってどんな賞を与えられ

るにも優る榮譽なのだという)。原本は表題を含む十六篇が収められているが、表題作の『燃える家』に焦点を当て、1980年代にアメリカの文学界でブームを巻き起こしたミニマリズムや時代背景を概観しながら、その代表格といわれるビーティに関して、彼女の描くテーマ、文体について考察していきたいと思う。

時代背景

ビーティの世代とは、アメリカに新しい価値観を誕生させる原動力となった、あの六十年代後半の文化大革命（Cultural Revolution）に青春時代を送った人たちで、現在、四十代半ばから五十代後半、日本でいえば団塊の世代に当たる。全米を揺るがしたこの文化的な一大変革の導火線的な役割を果たしたのは、ベトナム反戦運動だったが、すぐに黒人運動、学生運動、性解放運動なども合流して、長い間アメリカの道徳規範として君臨してきた、中産階級の価値基準が色あせ、新しい価値観が模索される状況となった。女らしさと男らしさの定義をはじめ、性的なタブーなど、日々の生活の中に深く浸透しているあらゆる固定観念や社会規範が、その根源から問い直される時代を迎えたことになる。そして、社会に不信感を抱いている人々にとって、愛がすべてで、愛が正義になっていった。

しかし、やがて日常生活の中から、性的なタブーやさまざまな偽善や不公平な差別が、徐々に改善され姿を消していくと、人々は何もまとわない自分、恋人、友人、配偶者、子供、いや人間の本性そのものにたった独りで立ち向かわざるを得なくなる。そして、そんな彼らを待ち受けていたのは、誰にも救いようのない深い孤独感と、決して満たされることのない愛に対する飢餓感であった。

前述した六十年代の「革命」は、長髪とジープを世に残して、精神的な支柱を表向きには求めながらも、裏では物質的な豊かさに溺れ、あっけなく消えていった。ポピュラーカルチャーを羅列するだけで、或は体制的なものを揶揄するだけで、成り立っていたのである。「自己中心的」で「実験的」なさらには「前衛的」な作風の文学が闊歩

していたということになる。そこに現れるべくして現れたのが、十分なダイエットを望む文学——短く、題材を極めて日常的なものを求めたもの、ミニマリズムの文学である。ミニマリズムは、このようにして七十年代後半に形成された。

そして、肝心なことは、ミニマリズム達の作品のモチーフは、その変容を遂げた日常生活に根ざしているという点である。つまり、物質主義の破綻の中で、配偶者、恋人、友達または親族などの精神的な違和感を題材とし、時代の流れに沿い、または要求に応えた形となっていた。

ミニマリズム

ビーティが本篇の『燃える家』を書いた八十年代は、アメリカ文学の中でどんな時代であったのであろうか。八十年代のアメリカ文学は、無論ミニマリズム・ムーヴメントを抜きにして語ることはできない。六十年代ニューヨーク、マンハッタンでは、美術界において無意味な装飾を一切排除し、表現技術を極力抑えた芸術活動が流行した。いわゆる美術界におけるミニマリズムである。そしてその影響を受け、八十年代における文芸界のミニマリズムが、いくらかでも形の見えるものとして定義づけられ始めたのは、八十年代の半ばを過ぎてからであった。

マディソン・スマート・ベルが1986年4月『ハーパーズ』の誌上において、「Less is Less.」の表題のもとに八十年代のこのムーヴメントを次のように批評している。「そして誰もが柔軟性のないニヒリスティックな世界観を持ち合わせているのだ。」ベルはミニマリストの代表として、レイモンド・カーヴァーを筆頭に、本篇で取り上げるアン・ビーティなどの名前を上げている。そして「ミニマル」という用語の他にベルは「根こそぎ剥ぎ取った」「衰弱し切った」「拒食症の」といった形容詞を彼らの作品に当てはめている。しかし、ベルの批判も、社会的な背景と密接に絡み合っていて、時代が抱える虚無感を静々と描いて見せるミニマリストたちと、その読者にとってはあまり効力はなかったように見えた。

静かな喪失と無言の暴力、やり場のない抵抗感、諦め。つまり、ミニマリズムは、六十年代のビー

ト族との断絶の中に創成されたのではなく、ビート族の延長として、よりソフィストケートされた形で、あの抵抗の場を社会・政治から日常生活へと巧みに移し変えたといえる。ミニマリズムは、八十年代の社会的な変質によって生れ、そして大量消費文化の波にもまれながら漂っている、エリート主義的な現実感あり、社会環境の中から、意図的に孤立しようとする、自発的な疎外感を描いている様に思える。

ミニマリスト達の手法

出来る限り状況設定を省き、感情を省き、作家の思想を省き、できるだけ言葉を省いた短篇小説のスタイル、ミニマリズム。日常生活のちょっとした出来事を簡潔な文体で描写するそのスタイルが、七十年代後半からアメリカ文学界を風靡し始め、その時代の若手作家たちに影響を与えた。それ以前のバース、ピンチョンに代表される、言語実験を核とする“膨大な小説”の反動とも言える。また例えばアーヴィングが気炎を吐く、19世紀的な、登場人物たちの一生を綴っていく“作家＝ストーリーテラー”という要素をも排除するミニマリスト達。それは前述したベルの論文“Less is less”に対抗するかのような“Less is more”，つまり可能な限り文章を縮めることで、より多くのことを語っている、とされる。小説を書く方法に、ヘンリー・ジェームズがニューヨーク版の序文で述べたように、小説を書くには二つの意識、「語る」意識と「示す」意識があることにも関係がある。ジェームズは「現実主義」の唱導者として、小説を書いていくのに、あるがままに「示す」ことを主張し、「語る」という作者の主観的作業を排そうとした。

それは、余韻とか余情を重視した「空間の表現」にあり、言い尽くさぬことに妙味がある。したがって、その解釈についても、「絶対不動の意味などというものを求めることはできない」のである。

更に八十年代のアメリカ文学において、ミニマリスト達がある一人の作家の影響を強く受け、時には、彼の文体を模倣するために多くの時間を割いてすらいたということは定説になっている。その作家とは、アーネスト・ヘミングウェイである。

ヘミングウェイ自身、文章の技法を印象派の画風から学んだというように、そこに用いられる単語も文体も極めてシンプルであり、行間には、無駄なものほとんど削ぎ落したという張り詰めた空気のようなものが感じ取れる。

日本においては、八十年代(1979年)に村上春樹が登場し、その作品にはアメリカのミニマリスト達とのいくつかの共通項が見られる。安保やセックスや麻薬ばかりが扱われているといった文学事象に辟易していた読者は、村上春樹の作品にある種の“救い”を感じたのだ。「じゃあもっとシンプルに書いてみようとは僕は思った。これまで誰も書いたことがないくらいに。シンプルな言葉を重ねることによって、シンプルな文章を作り、シンプルな文章を重ねることによって、結果的にシンプルでない現実を描くのだ。」¹⁾我々が求めていたのは、正にそういった世界だったのである。

アメリカ文学におけるカーヴァーやビーティは、その他のミニマリスト達も同じ様に、この作業を繰り返すことによって、読者との交信を図ってきたといえるし、文体(スタイル)だけをとって見れば、先に述べたヘミングウェイも二十年代から既にこの技法を用いてきたのである。

ミニマリストたちの小説には、平明な起伏をたどって、世のはかなさを嘆くまいとする、心満たされぬ既婚者や独身者たちの会話が続く。やがて行間の中に淡いパステル・カラーの小王国が出現し、余韻としてインテリ都会人たちの「退屈」と「陰うつ」が心に響き、清楚とも可憐とも見えるミニマルな文章の中に、短篇を読む楽しさと切なさが凝縮されている。

彷徨う都会派インテリ

結婚・不倫・離婚・麻薬・同性愛等、二十年後の日本の世相風景が予見的に『燃える家』に展開されている。登場人物は、私(エイミー)、その夫である会計士をしているフランク・ウェイン、その異父弟であるフレディ。更にフランクの雇い主で画廊を営んでいるタッカー、夫婦の共通の友人である、J.D.、そして私の恋人のジョニーなどである。この作品のプロットの中心を占めるのは、三十代前後のアメリカ人男女の恋愛観、結婚

観、人生観であり、そしてその生活感である。

ビーティの描く人々は、彼らが殆ど例外なく、アメリカ社会の中で上層中産階級のインテリに属し、物質的に何ら深刻な問題を抱えていない人々であるが、しかし幸か不幸か衣食住の問題からは開放されているが、心の中は例外なくそれぞれが問題を抱え、“不安定感”と“疎外感”に包まれている。

夫フランクの異父弟であるフレディは、繊細すぎる性格ゆえに、世渡りの上手な兄とは対照的に、目まぐるしい現代のアメリカの社会には入り込めないでいる。兄から紹介された、タッカーの画廊での仕事も、気まぐれで無愛想な接客態度や、麻薬 (joint) を吸って酔って (stoned) 職場に現われたり、勤務時間を守らないために首にされてしまう。現在は、兄夫婦の家に無為徒食の身で世話になっている状態である。

And “Freddy Fox, ”when Frank is feeling affectionate and he taught toward him. When we first met, I taught him to iceskate and he taught me to waltz; at Atlantic City, he'd go with me on a roller coaster that curved high over the waves. I was the one—not Frank—who would get out of bed in the middle of the night deli and put my arm around his shoulders, the way he put his arm around my shoulders, on the roller coaster, and talk quietly to him until he got over his latest anxiety attack.²⁾

「そして、フレディ。フランクが彼に親しみを示すときの呼び名で言えば、“レディ・フォックス”。初めてあったとき私は彼にアイススケートを教え、彼は私にワルツを教えてくれた。その夏には、アトランティックシティへ、波のはるか高くをカーブするローラーコースターに連れて行ってくれた。夜の夜中にベッドを抜け出し、終夜営業のデリカテッセンで会って、ローラーコースターの上で彼がしてくれたように肩を抱き、彼が新たな不安発作を克服するまで静かに話しかけてやるのは、フランクではなくわたしだっ

た。」雇用主だったタッカーや、兄フランクから見れば、現代社会の不適應者に見える落ちこぼれのフレディも、疎外感や不安感を持ち苦しんでいるのである。

また、週末ごとにフランクとエイミー夫婦の家を訪れ、酒を飲みひたすら自分の興味のあることだけを話し、それを聞くことを周りのものに強要し、我がもの顔に振る舞い響感を買っているタッカーも、また現代社会が生み出した犠牲者の一人と言えるかもしれない。

A years ago, Tucker was in Frank's therapy group in New York, and ended up hiring Frank to work as the accountant for his gallery. Tucker was in therapy at the time because he was obsessed with foreigners. Now he is also obsessed with homosexuals. He gives fashionable parties to which he invites many foreigners and homosexuals. Before the parties he does TM and yoga, and during the parties he does Seconals and isometrics. When I first met him, he was living for the summer in his sister's house in Vermont while she was in Europe, and he called us one night, in New York, in a real panick because there were wasps all over. They were “hatching, ”he said—big, sleepy wasps that were everywhere. We said we'd come; we drove all through the night to get to Battleboro. It was true: there were wasps on the undersides of plates, in the pants, in the plants, in the folds of curtains. Tucker was so upset that he was out behind the house, in the cold Vermont morning, wrapped like an Indian in a blanket, with only his pajamas on underneath. He was sitting in a lawn chair, hiding behind a bush, waiting for us to come.³⁾

「何年も前になるが、ニューヨークでフランクと同じ心理療法グループにいたのがタッカーだ。結局、タッカーは自分の画廊の会計士として雇うことになった。当時、タッカーは外国人が気にな

って仕方がないという脅迫神経症で、心理療法を受けていた。今はその上にホモセクシャル脅迫神経症に取りつかれている。流行りのパーティーを開いては、大勢の外国人やホモを招いている。パーティーの前には超越瞑想やヨガをしパーティーの最中には鎮痛剤のセコナルを飲んだり、筋肉強化トレーニングをしたりする。

私が初めてタッカーにあったのは、ヴァーモントの彼の姉の家でのことだった。そのときの姉はヨーロッパに出かけて留守で、彼はそこで夏を過ごしていたのだ。或る晩、彼はニューヨークの私達に電話をかけてきて、真底恐怖に駆られた声で、スズメバチだらけだ、とわめき立てた。「さなぎがかえっているんだ」と彼は言った。そこらじゅうで、でっかいスズメバチが眠そうな羽音をたててる、と。すぐいきます、と行ってわたしたちは、夜を徹して、ブラトルボロへ車を走らせた。彼の言ったとおり、食器の裏にも、植木の裏にも、カーテンのひだの中にもスズメバチがいた。タッカーはすっかりうろたえて、ヴァーモントの寒い明け方だというのに、インディアンのように毛布にくるまり、その下はパジャマだけという格好で家の裏にいた。庭椅子に座り、灌木の陰に身を潜めて、私達の到着を待っていたのだ。」

なんとも情けないタッカーの姿だが、ソーホーで大きな画廊を営むやり手タッカーの、ウェイン夫妻以外は知らない陰の一部分でもある。外国人とホモセクシャル脅迫神経症などの心の病を、心理療法を受けたり、超越瞑想、ヨガ、鎮静剤、アイソメトリックスによって克服しようとする、“癒し”の療法はアメリカ人のみならず、二十年後の日本人にも通じるものがある。

さらにもう一人心を病んでいる人物がいる。J.D.である。彼は、大学でフランクが英文学を学んでいる時の指導教官であったが、フランクは彼の教え子の中で、一番優秀で、ふたりは大学の外でも家族ぐるみの付き合いをするようになった。しかし、或る年の夏、フランクが英文学を止めて経営学の大学院に行くことと決めた夏に、J.D.の妻と息子は車の事故でこの世を去ってしまった。失意のJ.D.は大学を突然止め、世界各地へ放浪の出かける世捨人になってしまった。

“But you probably shouldn't listen to me. All I can do myself is run away, hide out. I'm not the learned professor. You know what I believe all the wicked fairy-tale crap: your heart will break, your house will burn.”⁴⁾

「でも、多分わたしのいうことなど聞かないほうが言いだろうね。わたしにできることと云ったら、逃げ出すことだけだ。どこかに身を隠すことしかできないのだ。私は博識な教授先生なんかじゃない。私の信じるものときたら、知っているだろう。“おまえの胸は破れ、家は燃え上がるだろう”なんていう、おとぎ話の底意地悪いたわごとを信じている男だからね」とJ.D.は自嘲げみに、恋人ジョニーとの関係が窮地に陥ったエイミーから忠告を求められたとき、苦しそうに心情を吐露する。J.D.のこのセリフは、この作品の題名『燃える家』の唯一直接的な言及部分となっている。

愛に対する飢餓感と孤独感

前述したようにプロットを中心に占めるのは、三十代前後のアメリカ人男女の恋愛観、結婚観であり、そしてその生活感である。そしてその生活の中で「希薄な家庭意識」というテーマが、現代のアメリカ社会を、そしてアメリカ社会の文化的影響を強く受ける現代の日本社会を映し出しているように思える。

当然のことながらビーティの作品には現代のアメリカの複雑で多様な家族のあり方がそっくりそのまま描かれている。男と女の関わりの中で、子がかすがいになることなど、今のアメリカではまずあり得ないといっている（今の日本もアメリカに慣れてきているように思える）。二親が揃っていることに越したことはないが、最も大切なのは、その二人の関係であると、アメリカ人の多くは考えている（日本人も然り）。子供を険悪な夫婦のもとで育てるくらいなら、むしろ片親のほうがいいと、殆どの人が信じているのだ。

この作品のフランクとエイミー夫婦も御多分にもれず、彼らも夫婦の危機を迎えている。夫に

はナタリーという愛人の存在が明らかになり、エイミーはジョニーという若い恋人と、夫との満たされぬフラストレーションを埋めるかのように、逡巡しながらも付き合っている。この夫婦には、六才になるマークという男の子がいるが、彼は両親の不和を敏感に感じ取って、彼が赤ん坊の様に指をしゃぶったり、時には一年ばかり前から夫婦の寝室に来て、冷たい足を母親であるエイミーに押し付けてきたり、未だ幼いのにいびきをかいたりするようになった。("When he's home, he avoids me. But it's rotten to avoid Mark, too. Six years old, and he calls up his friend Neal to hint that he wants to go over there. He doesn't do that when we're here alone."⁵⁾) 「家に帰ってきて、(フランクは)私を避けるの。でも、マークまで避けるなんて冗談じゃないわ。あの子はまだ六つよ。なのにあの人帰ってくると、友達に電話して、そっちへ行きたい、みたいなことをいうのよ。わたしと二人だけのときにはそんなことしないのに」息子マークの心理的な負担を思い、エイミーは何とか夫との関係を修復するため、フランクの本当の気持ちを確かめようとする。

しかし彼女は夫の愛人の存在を知りながらも、それを面と向かって問い質そうとはしない。エイミーが望んでいることは、彼の過ちを糾弾することではなく、夫との心と心の触れ合いなのだから。夫フランクは、優秀な成績であった英文学を止めて、経営学の大学院に進み、心理療法グループで知りあった画廊主のタッカーに見込まれ、彼の所で経理を担当している。週末ごとに彼の家に来て来るタッカーのご機嫌を取り、職無しの弟フレディの居候を許している。フレディに対しては、学校をちゃんと出ておいて欲しかったと思う反面、今ぶらぶらしていてもそのうち飽きて何か始めてくれると思っている、広い心の持ち主の極々一般的な人物として描かれている。落ちこぼれだが繊細で辛辣なフレディの言葉を借りれば、("You've got a swell wife and kid and dog, and you're a snob, and you take it all granted."⁶⁾)

「いかした女房とガキと犬が居るっていうのに、俗物のあんたは何もかもあって当然だと思って

いるんだ」というように、世渡りの上手な俗っぽいアメリカ人男性として描かれている。

週末ごとにやって来る夫の上司のために、嫌な顔もせずにおいしい料理を作ってもてなしたりする、子供思いのエイミー(日本で言えばさしずめ良妻賢母型)と、一見良き夫風のフランクはなぜか心と心が離れてしまい、理解しあうことが出来ずにいる。悲しいことに二人は結婚していても、J.D.よりもタッカーよりも、フレディよりも誰よりも夫フランクの心が掴めないエイミーであった。(Frank is harder to understand. One night a week or so ago, I thought we were really attuned to each other, communicating by telepathic waves, and as I lay in bed about to speak I realized that the vibrations really existed: they were him, snoring.⁷⁾) 「フランクは彼らよりももっと分かりにくい。一週間ほど前の夜、私は彼と共鳴し合っていると、テレパシーの波で通じあっているのだと思ったことがあった。ベッドに横になったまま話し掛けようとして、ほんとうに波が起こっているのに気づいた。それは彼のいびきだった。」彼らは、滑稽なほど絶望的に分かりあえないでいる。

或る晩遂にエイミーは、宙ぶらりんのフランクとの関係に何とか決着をつけようと、勇気を出して彼の真意を問い質そうとする。

"I want to know if you're staying or going." He takes a deep breath, lets it out, and continues to lie very still. "Everything you've done is commendable," he says. "You did the right thing by finding yourself a normal friend like Marilyn. But your whole life you've one mistake — you've surrounded yourself with men. Let me tell you something. All men — if they're crazy, like Tucker, if they're gay as the Queen of the May, like Reddy Fox, even if they're just six years old — I'm going to tell you something about them. Men think they're Spider-Man and Buck Rogers and Superman. You know what we all feel inside that you don't feel that we're going

to the stars.⁸⁾

『貴方が出ていくのか行かないのか知りたいのよ』フランクは大きく息を吸い込み、吐き出して、そのままじっと横たわっている。『君のしてきたことは何もかも見上げたものさ』フランクが言う。『大学に戻ったのも正しかった。マリリンみたいなまともな友達を作って、正しいことをしようとした。君が一つだけ侵した過ちはな、男どもに取り巻かれたってことさ。ちょっといわせてもらうぜ。君の周りに居るのは男ばかりだ。タッカーみたいな気違いだったり、レディ・フォックスみたいな“五月の女王”ばりのゲイだったり、たった六才のガキだったりするけどな。教えてやるよ、男なんてものを。男なんてものはな、自分をスパイダーマンやバック・ロジャースやスーパーマンだと思っているのさ。俺達が心の中で感じていて、君が感じないことが分かるか。俺達は星へと向かってると感じてるんだ。』ここに、男と女の決して交わることのない愛に対する深い溝についての述懐がある。このシーンに漂う虚無感、静かな喪失とやり場のない抵抗感、諦めは、作者ビーティが彼女の作品の中に描こうとしたテーマであった。「私は社会学者ではないから、自分の作品で何か主張しようとは思わない。人生でのある時点でその人生を見失った人々が、一生懸命妥協している姿を描いている。私のテーマの多くは“喪失”です。その喪失にどう人々が対処しようとしているかを提示しているだけ……。」⁹⁾ ビーティは登場人物の心の中に踏み込み、その心理を見てきたように表現するのではなく、行間に崩れゆく家族や切れそうな男女の絆に直面した、人々の内面、「愛へ飢餓感や孤独感」をあぶり出す。決して正面切って憎しみや嫉妬などを描き出すことなく。

作者ビーティは、私小説の世界をさらに日常的なレベルにまで引き落とし、より質の高いシンプルな文体を駆使して、読者との心と心のコミュニケーションを図ろうとした。本篇のヒロイン、エイミーをはじめ、J.D.もフレディも、タッカーもフランクも、子供のマイクまでもが、必死にしかしソフィストケートされた形で人間本来の意志の

疎通を企てようともがいてはいるが、彼らはしばしば幸せを求めながらも幸せになるためには何をすべきなのか、そもそも幸せとは自分にとって何なのかさえ分からないという印象を受ける。「I don't do anything, because I'm waiting, I'm hold.(J.D.);I stay stoned because I know it's better to be out of it (Freddy);I love art because I myself am a work of art(Tucker).」¹⁰⁾

「私は何もしない。待っているのだから、待期中のだから。(J.D.)おれはずっと酔っ払っている。余計な関わりを持たないほうがいいからさ。(フレディ)おれは芸術が好きだ。おれ自信が芸術作品だからね。」そして、フランクは前述したように、「男なんてものはな、自分をスパイダーマンやバック・ロジャースやスーパーマンだと思っているのさ。……俺達は星へ向かっていると感じてるんだ。」登場人物たちの多くは一種の疎外感を抱いていて、それをストレートに表現しないで、微妙な形で表そうとしている。彼らは幸せを積極的に探そうとはせず、自分の生活を調整しながら、自分たちの置かれた状況の中で、出来る限りの妥協を見出そうとしているように見える。人生の微妙な陰影を知った人々は、時の流れに抗して血を流しあうのではなく、その流れに身を委ねて浮遊し、人生を模索しさまよっているように見える。

おわりに

七十年代に高校・大学生生活を経験し、六十年の闘争に遅れ、八十年代のコンピューター時代には早すぎた中途半端な無個性な時代、レヴィットが「あらかじめ失われた時代」と称した時代に生まれたビーティは、アメリカ文学の八十年代、ニューリアリズムに端を発し、ミニマリズムへと吸収される中で、その当時の社会的な背景と密接に絡み合い、よりソフィストケートされた形で抵抗の場を社会・政治から日常生活の場面へと巧みに移し替えながら作品を生み出していった。ビーティ自身を含む周囲の都会派（ニューヨーク東部）のインテリ達の日常を観察し、それを仔細に描くことが彼女の作品のテーマの中心になった。

そうした日常の属目が作品の支えとなり、また継ぎ目ともなって、場面場面を連結している。そ

の結果、日常の目に触れた光景の一つ一つが、作品にとって転換点とも、人間にとっての啓示的瞬間ともなる。肩の力を抜いたシンプルな文体によって、表現される繊細な優しさ、衝動性、上層中産階級の人々の仕事や夫婦関係、希薄な家庭意識、因果関係の弱さなど、彷徨うアメリカの都会人の疎外感、孤独感が、ある種の礼儀正しいニヒリズムを醸し出しながら描かれている。

(『燃える家』の頁数は The Burning House, Short Stories by Ann Beattie, Vintage Contemporaries Vintage Books, A Division of Random House, Inc. New York First Vintage Contemporaries Edition, September, 1995 年のものである。)

註

- 1) 村上春樹著、『村上春樹全作品 1979-1989 ①』、「台所のテーブルから生まれた小説」P.v, 講談社, 1990年 より
 - 2) The Burning House 254 頁
 - 3) 同上, 253~254 頁
 - 4) 同上, 251~252 頁
 - 5) 同上, 244 頁
 - 6) 同上, 243 頁
 - 7) 同上, 255 頁
 - 8) 同上, 256 頁
 - 9) 『燃える家』アン・ビーティ著, 亀井よし子訳, 「解説」 より
 - 10) The Burning House 255 頁
- 〈参考書〉
1. 『ユリイカ』臨時増刊号 第21巻 第8号 青土社, 1989年
- 〈作品〉
1. The Burning House, Short Stories by Ann Beattie. Vintage Contemporaries Vintage Books, A Division of Random House. Inc. New York. First Vintage Contemporaries Edition, September, 1995
- 〈研究書〉
1. The Critical Response to Ann Beattie Edited by Jaye Berman Montresor, Critical Responses in Arts and Letters, Number 4 Cameron Northhouse, Series Adviser Greenwood Press, 1993
 2. 『燃える家』アン・ビーティ著, 亀井よし子訳, ブロンズ新社, 1989年